

2021年8月1日 礼拝説教要旨

詩編講解説教71「老いて白髪になっても」

詩編71：18～24、ルカ2：36～38

詩編第71編は「嘆きの詩編」に分類されます。「わたしが老いて白髪になっても、神よ、どうか捨て去らないでください」（18節）「捨て去らないでください」という言葉が示すことはこの人はすでに捨て去られている、見放されている状態にあるということです。この詩人は老齢であると考えられます。わたしたちも年老いて捨て去られているように感じることもあるかもしれません。現代社会は老いることが必ずしも祝福されていない社会です。それまでは職場でも、家庭でも社会の中心にいた人が、退いてだんだん周辺に追いやられてしまう。そういうことを感じて寂しくなるという経験があります。コロナ禍で人と会う機会が極端に減り孤独を感じる。そこで自分が見捨てられていると感じてしまう人もおります。

また老いるということはいろいろなものを手放さなくてはならないことでもあります。夫や妻に先立たれることがあります。子どもたちも独立して親元を離れていきます。体力や健康も、それまでの社会的地位、交友関係等々、いろいろなものを手放していかなければならない。そこに寂しさを感じるという人も多いでしょう。オリンピックを観ていると、まだ10代の若々しい選手がたくさん活躍しております。そういう姿を見て初々しさ、頼もしさを感じると同時に、寂しさを感じることがあります。若い時の活力はもはやありません。力が削がれ、心が削がれ、自分自身が失われていく。でもそれはむしろ本来の、ありのままの人間に帰っていくということではないでしょうか。若い頃はなんでもできると考えていました。でも年老いてどんどん力が失われていく。何もできない。そこに神さまの御前に生きるありのままの人間の姿がある。しかしそういう失われていく自分を受け入れるのは実はとても難しいことなのです。この詩編はそういうわたしたちの孤独や寂しさを知っています。

それは他でもない神さまがそういうわたしたちの孤独や寂しさに寄り添われるお方だからです。それがイエス・キリストの救いです。キリストは十字架で「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」と叫ばれました。弟子たちからも見捨てられ、その死の極みにおいて、神さまからも見捨てられたと感じる、わたしたちが孤独を感じたり、見捨てられたと感じる、もっと深いところにキリストは降りて来られた。それは無力な、ありのままのわたしを受け止めていてくださるためです。わたしたちはそのことを信じることができるのです。それは老いていくわたしたちにとって何よりの慰めではないでしょうか。

でも神さまはただ降りて来られただけではありません。そこからわたしたちを救い出してください。イエス・キリストは十字架で死んで、三日目によみがえられました。「地の深い淵から、再び引き上げてくださるでしょう」（20節）その通り、キリストはわたしたちを死から引き上げてくださるためによみがえられ、天に昇られました。「神よ、恵みの御業は高い天に広がっています」（19節）ここには「地の深い淵」から「高い天」へという飛躍があります。何よりここにキリストの十字架とよみがえりの御業が示されていると理解してよいでしょう。

そのようにして神さまに力づけられ回復されたわたしたちの具体的な生き方がこの詩編には明らかにされています。「御腕の業を、力強い御業を、来るべき世代に語り伝えさせてください」（18節）「来るべき世代」というのは「若い世代」のことです。これからの時代を生きる若い

世代に神さまの御業を語り伝えること。それが老いてくわたしたちに与えられた務めなのです。そこでの視点は将来に向かっていきます。歳をとると過去のこと、若い時のことを思い出しては郷愁に浸るということがあります。過去の栄冠にしがみつくことがあるでしょう。でもそうではなく将来のこと、それは究極的には来るべき神の国を見据えるということでしょう。そのようにしてわたしたちの目線を前に向けることが重要なのです。

それは具体的には神さまの御業を語ること、この世の知恵、経験というよりも神さまの知恵に目を向けさせることです。最近、手に入れた本ですが、『アーミッシュの老いと終焉』という本があります。アメリカにアーミッシュという独特のキリスト教の教派があります。元々は宗教改革の時代に再洗礼派という流れの中にあって迫害を受け、その後アメリカに渡って独自の信仰的なスタイルを確立していきました。17、18世紀当時のアメリカ移住の頃の生活を現代でも続けています。ちょうど『大草原の小さな家』のあの世界がそのまま再現されているような生活がそこにあります。農作業に従事し、電気を使わず、移動は馬車を使い、ほとんど自給自足のような生活です。でも近年、現代の生活に疲れ、アーミッシュに癒しを求める人が増えているということが本の中に書いてありました。そういう体験ツアー、ツーリズムに人気が集まっているそうです。

その本の中にこういうエピソードがありました。女性たちが集まっておしゃべりをしながらキルトのベッドカバーを作っている。アーミッシュの品はいいので高い値で売れるそうですが、若い人たちがそういう金儲けの話をしていた。すると一緒に作業をしていた老婦人が口を開いた。「いいかい。神は『富を得ようと苦労してはならない』とおっしゃる。お金やものは、持てば持つほどもっと欲しくなるし、手に入れようとしてあくせくとすると、心の平安とゆとりをなくしてしまうからね。それだけじゃないよ。神がお嫌いになる「高ぶる心」、つまりうぬぼれと思い上がりが生まれる。わたしたちがこうして同じ服装をしているのも、装飾品を身につけたり、家の中を飾ったりしないのも、「高ぶる心」を持ちたくないからなんだよ」そのように静かに教え諭すのです。その光景が目浮かぶようで何か微笑ましく思います。

老いていく者の役割を神さまはちゃんと与えていてくださいます。無理をして若くあろうとする必要はない。しゃしゃり出て自己主張をすることでもない。いろいろなものを失っていくままで、ありのままで、ただ自分に注がれた神さまの恵みの御業を語る。神の知恵を語る。神の国の話をする。そういうことを話せるのは長い人生の中で神さまからたくさんの恵みをいただいていた者だけなのです。来るべき世代が少しでも祝福された人生を送ることができるように、神さまの御業を語り伝える。そのためにどうかわたしたちを用いてくださいと祈るばかりです。